もくじ

・　なめとこ山(やま)の熊(くま)

# なめとこ山(やま)の熊(くま)

原作(げんさく)：　宮沢(みやざわ) 賢治(けんじ)

イラスト：　かつなが みつとし

編集(へんしゅう)：　YellowBirdProject

なめとこ山は、それはそれは大きな山で、山頂は一年中、分厚い雲か、冷たい霧に覆われていました。

この山の中腹には、大きな滝があって、その辺りに、むかし、熊がたくさんいました。なめとこ山の熊の胆は、良く効く薬として、当時重宝されていました。

熊獲り名人の小十郎は、熊を獲って、その毛皮と胆を売って暮らしを立てていました。小十郎は、大きな体に、木の皮で作ったみのと、丈夫なすね当てを身につけ、鉄砲を担いで、たくましい犬を連れて、毎日なめとこ山に入っていきました。

なめとこ山の熊たちは、木の上から、険しい山道を歩く小十郎をながめていました。

その日、小十郎は、熊を一頭しとめました。小十郎はしとめた熊に注意深く近寄り、刃物を使って、ていねいに熊をばらしました。

5

「ああ、熊よ。おれはお前が憎くて殺したわけじゃないんだ。おれも本当は、こんなことをしたくないんだ。だが、うちには畑もないし、里に降りても、他に仕事もない。お前が熊に生まれたのが因果なら、おれも、こんな商売が因果だ。やい、熊よ。お前も今度は、熊なんかに生まれてくるんじゃないぞ」

小十郎は、熊をばらしながら、いつもこんなことをつぶやいていました。熊たちも、小十郎の気持ちを良く理解していましたから、この山の熊たちは、だれも小十郎を憎んではいませんでした。

小十郎は、恨みも憎しみもない自分に殺されていく熊たちに深く同情し、いつしか、熊の言葉さえもわかるようになった気がしていました。

その年の春も、まだ木の葉が青くならないうちに、小十郎は犬を連れて、なめとこ山に入りました。